

## 芸術文化振興ビジョン検討委員会における検討経緯

### ○ 第1回芸術文化振興ビジョン検討委員会

開催日：令和2年8月28日（金）

内 容：第2期ビジョンの評価・検証

改定ビジョンの方向性 等

（審議内容の詳細については、議事要旨を参照）

### ○ 第2回芸術文化振興ビジョン検討委員会

開催日：令和2年11月12日（木）

内 容：第3期芸術文化振興ビジョン（素案）について

（審議内容の詳細については、議事要旨を参照）

# 第1回芸術文化振興ビジョン検討委員会 議事要旨

令和2年8月28日(金)10:00~12:00  
兵庫県民会館10階「福の間」

## 1 開会

## 2 開会挨拶

藤原知事公室長が挨拶を行い、芸術文化振興ビジョン改定に向けた審議を依頼した。

## 3 委員紹介

## 4 資料確認・会議の公開にかかる報告

資料の確認と、会議の公開について、事務局から説明を行った。

## 5 委員長選出

委員の互選により、佐竹隆幸委員（関西学院大学専門職大学院経営戦略経営科長）が委員長に選出された。副委員長として、加藤隆久委員（神戸文化芸術会議議長）、山本亮三委員（兵庫県芸術文化協会理事長）が選出された。その後、佐竹委員長が、委員長就任にあたり挨拶を行った。

## 6 資料説明

協議に先立ち、芸術文化振興ビジョン改定の概要、背景、これまでの取組と課題等について、資料に基づき事務局が説明を行った。

## 7 協議

- 兵庫県は財政的に厳しい状況にあるが、芸術文化に関しては、ソフトもハード整備も頑張っている。この流れは、「芸術文化立県ひょうご」ということから、継続してほしい。

しかし、一部の人たちが頑張っている活動が、多くの人達に届いていない現状がある。県民と一緒に、「芸術文化を盛り上げよう」という、そういう呼びかけがもっとあっても良い。新たなビジョンには、県民への情報発信を取り入れる必要がある。

- 兵庫県内の芸術文化団体はどこも、高齢化の問題に直面している。また、最近の若い人は、団体に属さない傾向にあるため、若い人が入ってこない。このような状況のなか団体を継続させるためには、アウトリーチ活動が重要になってくる。

しかし、コロナの影響で、今年は学校訪問が難しい。また、障害者学級への指導を行うことが出来る人材がなかなかいない。県と連携しながら、アウトリーチ活動をどんどんやっていきたい。
- 市町中心の六古窯サミットは既にあるが、産地の中にある工芸士会が今後協力して行こうという初の会合を開きたい。
- 全国の公共ホールにおいて、アーティストをとりまとめ、プロデュースする人材の高齢化が進み、アーティストの得意分野とホールの間を取り持つ人が減ってきている。こうしたアーティストの活動能力を活かす整備に対する行政側の支援が若干足りない。

以前、芸術文化協会では「アートマネジメント講座」をやっていた。アートマネジメントに対する県の指導が必要である。新たなビジョンには、人材育成にアートマネジメントの面も含めてほしい。
- プロデュース力をもつ芸術文化センターの考え方を、もっと地域に伝えてほしい。県には、大小多くのホールがあるが、そういったホールが育っていくようなプロデュースの仕方を、県が講座を行うなどして広めていただきたい。
- 芸術文化センターはマネジメントに特徴があり、優れたマネジメントによって大きな成果をあげた全国的にみても先進的な施設である。例えば、劇場に足を運ばない人にも大きな変化を与えているという点が挙げられる。市民にとって、将来に残したい町の魅力となっており、地域には多くの支援者がいる。
- 兵庫県は、地域差はあるが、文化に対して興味がある人が多い。これは、阪神・淡路大震災のなかで、芸術文化が果たした役割に人々が共感したからではないか。こういった県民の方々の意識をもとに、コロナ禍の後、どのように芸術文化を復活させていくかが重要になってくる。
- ICTの活用については、コロナ対策もあるのでぜひ積極的に進めてほしい。しかし、リアルで時間と空間を共有するという芸術文化の本質的な部分と、ICT活用により潜在的なマーケットとして掘り起こすことが可能かどうかということとは、上手くバランスをとっていく必要がある。
- 障害者が芸術に取り組む際に最も大きな障害は、地域性だけではなく、経済面ということ忘れてはいけない。その点、アウトリーチのような考え方は良い。

だが、アウトリーチを進めることは、コロナ禍の中で課題も多い。

- 観光や産業との連携については、行政のあり方に配慮する必要がある。
- プラットフォームの整備は非常に重要である。県・市町の行政がまたがる分野を、プラットフォームで上手く回していく必要がある。
- コロナによって全てが変革を余儀なくされている。こういう時だからこそ芸術文化の力は必要ということを改めて感じている。これをきっかけとして、大きなステップアップができれば良い。

また、阪神・淡路大震災の後、芸術の力が見直されるきっかけとなったというのは、本当にその通りである。その後、東日本大震災があり、今回のコロナがありということで、社会に関わっていききたいという作家たちの思いや、社会的関与芸術というのが盛んになってきている。今後は、社会との連携が重要になってくるだろう。
- 兵庫県は広く、自然も豊かで、芸術文化の歴史もある。栄えている阪神だけでなく、播州、丹波など、それぞれの地域が、大きな可能性を有している。こうした地域の文化を、どのように繋げていくかが今後の課題である。互いに協力しながらも、目に見える成果が実感できるような仕組みをつくっていく必要がある。
- 兵庫県は、摂津・播磨・丹波・但馬・淡路の五国からなり、それぞれに多彩で特色ある文化がある。また、文化だけでなく、観光や産業の面においても特色がある。そういうものの連携を深めていくことが重要である。具体的には、文化や観光、産業といった異なる分野の人たちが一堂に会し、討論し、芸術文化について発表する、そういう場をつくってほしい。
- 兵庫県には著名な芸術家が多く、多彩な芸術文化もあるが、高齢者と若い人の交流が欠けているという問題がある。今後は、若い人と高齢者の世代間交流を促進する仕掛けを作っていく必要がある。
- コロナ禍から生まれた新しい創造・発信の手法は、今後も進めてほしい。
- 県内で若手アーティストが活躍できるイベントを開催し、地元で若手を育てていくことは重要である。イベントに参加することで、若手の芸術家達も兵庫という場所に愛着がわき、県民にとっては若手の芸術家を応援するきっかけとなる。若手の芸術家を地元で支え、そうして育った芸術家たちが自分たちの力を地元で発揮・還元していく。そういった循環を、さらに強めていくことを考えて、ビジョンを改定していく必要がある。

- 兵庫県は、高校での音楽教育の充実や、芸術文化センターのスーパーキッズオーケストラの存在によって、若手の音楽家がどんどん育つ流れが出来ている。そういった流れが、音楽に限らず、色んな分野で見られるようになってほしい。
- 例年開催していた様々なイベントが、今年は残念ながらできなくなった。また、長期にわたってのホールの休館や美術事業の中止、厳しい入場制限をしながらの開催など、不本意な状況に陥っている。本来は、こういう時こそ、芸術の力やその魅力をお伝えしていくことが必要であるのに、それができない。IT 技術を使つての発信も必要だが、生のものをどういう形で伝えるかも、今後は考えていく必要がある。安全と芸術の振興をどのように両立させるかが問われている。それができてこそ、芸術文化の振興、存在感というのが発揮できるのではないか。
- 一般に「政治・経済・社会・文化」と言われるが、文化が最後に言われるのは、根本的なものだからである。それほど、文化というのは人々の大事なものであり、これまで兵庫県が芸術文化に力を入れてきたことは評価できる。

また、県内には多くの著名な芸術家があり、来年4月には専門職大学が開学されるなど、他府県と比較しても頑張っている。さらに、県庁の建て替えによって、県庁周辺が新たな芸術文化の拠点となりうる可能性もある。
- 文化庁は、日本遺産が認定されるようになってから、保存から活用に舵を切った。しかし、全ての人にとって、芸術や文化が興味の対象となっているのかというと、そうではないというところから出発しなければいけない。地域の歴史文化だからといって自身の地域のアイデンティティと観光資源を同一に考えることは危険である。
- 芸術や文化を観光と結びつけるには、芸術や文化の側から、観光に接近するという態度をとる必要がある。従来から芸術や文化に親しんでいる方からすると、高い成熟度の芸術や文化でも観光のコンテンツとなり得るが、大勢の皆さん方からすると、そうではない可能性がある。

芸術や文化は敷居が高いという人にとって分かりやすい環境とは何かを、徹底的に議論する必要がある。
- 地域の文化を資源にするためには、例えば兵庫5国の独自文化を分かりやすく示すコア施設が必要だ。コア施設から派生した拠点施設が市町にあることによって、より分かりやすくなるだろう。

芸術文化側から、見やすさ、わかりやすさを伝えることができれば、より多くの方たちが芸術文化に接することができるようになるのではないか。

- 見せ方を変えるということにもっと積極的にならないといけない。瀬戸内国際芸術祭は、現代芸術が設置されたことで景色が変わり現代芸術に分かりやすさを生み出した。表現者の側から、鑑賞者である観光客に対し、接近をしたことの一例である。見せ方に対して、もっと議論が必要だ。
- 受け手側である消費者を育てることも重要である。観光は、あくまで原初の感動しか与えることはできない。その原初の感動から、より成熟度の高い芸術や文化に関心を持つ観光客を作るためには、芸術・文化に接する機会を早い段階で作り上げていくこととセットにしないといけない。
- 芸術文化の定義とはなんなのか。「芸術・文化」としたほうが、観光側や多くの県民に向けて分かりやすいのではないか。
- 子ども達へ伝統音楽を普及するために学校にお願いをしているが、授業の枠等の理由でなかなかできない。なんとか放課後に時間をとれても、今の子どもたちは塾などで忙しく、放課後に邦楽に時間をかける親がいないというのが現状である。  
一方で、伝統音楽は簡単に身につくものではなく、身につけるとなると学校に取り入れるしかない。兵庫県にも、伝統音楽専門の学校を作ってはどうか。
- コロナ禍で、屋外で演奏する機会が増えた。屋外の劇場があっても良い。
- 2018年には、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」ができ、それに合わせてできた「文化芸術推進基本計画－文化芸術の「多様な価値」を活かして、未来をつくる－（第1期）」のなかには、障害者との共生あるいは包摂ということが、目標・戦略として取り上げられた。これは、ここ5年の大きな変化である。
- 障害者芸術が注目された1990年代半ばは、兵庫県は全国的に先進県だった。しかし、その後、兵庫県は他府県に比べやや遅れをとっている。文化庁では、「障害者による文化芸術活動推進事業」という事業を進めているが、兵庫県は、応募と採択、どちらをとってもやや低調である。
- 特別な才能のもつスターのような障害者を輩出するということではなく、誰もが当たり前、やりたいと思うことが出来るようになってほしい。具体的には、健常者が普通にできる習い事を、障害者も普通にアクセスできる社会を実現したい。パラアスリートをコンテンツ化して消費するような風潮もあるが、そうではなく本当の意味で当事者に寄り添うことが、共生であり包摂である。

- 文化芸術の関係者の意識改革が重要である。障害者福祉の関係者は既に、障害者芸術の法律について詳しく知っている人は多い。一方で、芸術文化関係者にはそういったことを意識している人は少ない。具体的には、学芸員とかホールの関係者の意識改革を進めていってほしい。こうしたことは、障害者だけでなく、マイノリティや子育て世代にとっても望ましいことである。そのことをビジョンにとりいれてほしい。
- 社会包摂といった言葉を項目化してほしい。項目とすることで、県が頑張っていくことがより可視化できるようになる。
- 阪神・淡路大震災において文化財をマネジメントする人がいないことがわかり、その後、人材育成に力が入った。県内では、ヘリテージマネージャーが、これまで500人以上育ってきている。これは、当初こそ行政の主導で動いていたが、現在は民間の力で、民間人材を育成している。現在もこうした動きは続いており、全国に拡大している。
- 文化財保護法の改正によって、文化財保存・活用地域計画ができ、資産を将来に活かす法的な組み立てもできた。地域の歴史遺産を示す文化財のリストづくりも進んでいる。
- 国宝や重要文化財など、千年単位で考えないといけないものを変えるのは難しい。しかし、その周囲にあるバラエティ豊かなものは、活用を前提にしない限り継承することができないだろう。それらをコーディネートができる核となる施設、例えばヘリテージセンターを、文化圏ごとに拠点として整備できないか。
- コロナで観光分野はストップしたが、「GoTo トラベルキャンペーン」によって、一軒貸しをしている宿泊施設は、すぐに復活したと聞いた。これは、コロナ以降の人の動きに関するヒントとなる。コロナ以降、ICTの活用は重要となるが、ゆったりと安心できる場所もカウンターカルチャーとして必要になってくるだろう。
- 芸術文化の場を育て広げるには、学校教育の役割が重要だということを改めて感じている。しかしながら、学校現場は、文科省から、授業数の確保と教員の働き方改革を要求されている。そうしたなかで、各校長は、行事の精選を余儀なくされている。そのため、ほとんどの学校で芸術文化に触れられる機会は減ってきている。

- 「わくわくオーケストラ教室」は素晴らしい事業だが、現場では大きな課題がある。それは、遠距離在住の中学生が西宮まで行かなければいけないことである。それも貴重な経験と考えることもできるが、授業の確保という点から考えると厳しい。例えば、豊岡にも素晴らしいホールは沢山ある。県内の他の地域にもそういった音楽鑑賞のできるホールがたくさんあるので、そこに来て演奏していただくと、とてもありがたい。
- 学習指導要領が新しくなり、キャリア教育が大きく取り上げられるようになってきた。AIによって今ある仕事は半分なくなると言われているが、芸術文化はおそらく今後も絶対なくなる職業だろう。そういったことも含めて、芸術文化について子ども達に伝える場をつくりたいと思っている。
- 兵庫県は、阪神・淡路大震災以来、芸術文化を心のビタミンとして、力を入れてきて現在までやってきた。しかし、コロナ禍によって、当たり前のことが制限されるようになってしまった。新たなビジョンには、コロナ禍の教訓をしっかりと含めていただきたい。
- コロナ禍によって、多くのアーティストがリモートで配信することとなった。その際に、県の動画配信の補助はありがたかった。

一方、動画作成には、演奏家の自前の知識、技術だけではどうしても限界がある。そのため、今後、世界に向けて発信するには、ICTに関する研修等のシステムを構築してほしい。演奏プラスアルファのものがないと、効果的な発信はなかなか難しい。
- 同じ空間・時間を共有してその場で演奏を聴いていただくのが演奏家にとって一番の願いである。そのためには、安心・安全に演奏を聴けるホールが必要である。今後は、客席数を少し減らすなど、感染症に対応した新たなホール作りを考えてほしい。
- 「芸術文化を“する、見る、ささえる”主体となる県民意識の醸成」というのは良いキャッチフレーズ。兵庫県は「する」という面は非常に良い。若い人たちが芸術に親しんで発表する場はできてきている。問題は「見る」である。鑑賞者が高齢化し、なかなか若い世代の方に来てもらえない。積極的にこちらから出向いて行って、学校現場で公演させていただくことが大事になってくる。若い人たちが音楽に親しむ環境に力を入れていただきたい。



- 兵庫県の文化にはいくつかの強みがある。例えば、芸術文化センターは、全国的に力をいれている施設である。また、専門職大学や龍野アートプロジェクトは、もはや、地域の生き方や暮らし方を変えていく一つの大きなプロデュースとなっている。そういった強みを、これからは全国に伝えていく必要がある。そのためには、県の強みを我々が改めて認識する必要がある。
- コロナの動画配信事業では、優秀な若いアーティストが多数参加した。若手アーティストや先進的・前衛的な分野のアーティストを、どのように応援していくかも考えていく必要がある。
- 龍野や丹波篠山における地域でのイベントも大きな力となろうとしているが、これらのイベントがより飛躍するためのサポートも、今後必要になってくる。
- 兵庫県というのは書道王国でもある。書道分野において、日本中から兵庫県に多くの人を訪れる集客力のある文化である。そういったことを一つの大きな資産とする必要がある。それが文化の価値を高めることにも繋がる。
- 今後、少子高齢化のなかで地域の伝統文化を支える人がいなくなり、消えてしまうことが予想される。これを世の流れとして仕方ないと思えるのか、保存すべきと考えるのかは難しい問題であり、議論すべきことである。同様に、コロナによって祭りもなくなった。祭りがなくなると文化もなくなってしまふ。心しておかないといけない。
- 音楽は生でなくてはならないと思うが、実際には会場への入場は制限され、お年寄りもなかなか来ることが出来ない状況にある。したがって、動画配信と生の鑑賞体験は、並列で行っていかなければいけない。
- ICTに関して、単に流すだけでなく、それが市場で成り立つかということを考えて支援する必要がある。それが行政の役割である。例えば、クラウドファンディングの支援などが挙げられる。
- アーティストと行政とその関係者で話ができるというのが兵庫県の強みである。様々な事業を展開する上で、直接話ができる関係が大きな力にもなる。それがベースとなり、プラットフォームの一つの大きな機能となるだろう。

## 8 諸連絡

議事録の公開と次回の日程調整について、事務局から説明を行った。

## 9 閉会挨拶

藤原知事公室長が、閉会挨拶を行い、今後のさらなる審議を依頼した。

## 10 閉会

## 第2回芸術文化振興ビジョン検討委員会 議事要旨

令和2年11月12日(木)15:00~17:00  
兵庫県民会館7階「鶴の間」

### 1 開会

### 2 開会挨拶

藤原知事公室長が挨拶を行い、引き続き芸術文化振興ビジョン改定に向けた審議を依頼した。

### 3 委員長選出

佐竹隆幸委員長の逝去に伴い、委員の互選により、加藤隆久委員（神戸文化芸術会議議長）が委員長に選出された。副委員長として、山本亮三委員（兵庫県芸術文化協会理事長）が選出された。その後、加藤委員長が、委員長就任にあたり挨拶を行った。

### 4 資料説明

協議に先立ち、芸術文化振興ビジョン改定の素案等について、資料に基づき事務局が説明を行った。

### 5 協議

- 兵庫県は震災以後、財政的に非常に苦しい状況が25年続いているが、そのなかにおいても、拠点施設は、しっかりと整備してきた。例えば、兵庫県立美術館や芸術文化センター、兵庫陶芸美術館など、色々な拠点施設をしっかりと整備し、文化振興を図っている。この設備の充実は、他の県にも十分に自慢できる兵庫県らしい整備だと思うので、しっかりとアピールをする。また、その拠点施設を活かして、もっと文化振興を図っていくべきである。  
新型コロナウイルス感染症により、人の移動や多くの人が集まって文化に親しむことが難しい状況にあるが、いずれはワクチンの開発やいろいろなことで少しずつ解消していくと思うので、将来も踏まえた拠点の活用について考えてほしい。
- 地域の活性化に文化力を使っていこうという考え方は、難しいけれども、兵庫県らしい取り組みとして力をいれていただきたい。  
そのシンボルの一つが、豊岡の専門職大学だと思う。これは、芸術・文化・観光を主体とした専門職大学であり、全国的に珍しい。芸術文化が地域づくりと上手くマッチングするという期待感がある。こういった動きを兵庫県らしい動きと捉えて、芸術文化振興ビジョンの具体的なところに落とし込んでほしい。

- 素案に対して、自分たちがどのような活動ができるかということ考えたとき、アウトリーチ活動が浮かんだ。工芸美術は分野が非常に広いので、実際に生徒さんたちに体験していただける。その点、需要が大きいと思う。  
今後とも積極的に活動していきたいが、県が、団体や会員の情報をデータベースとして一元化し、「こんな所に行ってほしい」という要望を伝えてほしい。
- 高度な技術をもったベテランの芸術家の技術保存も大切である。今後は、記録にも取り組んでいただければありがたい。
- 私の知る限りだが、色々な文化団体の横の繋がりがあまりない。交流があるようでないので、県が間に立って、情報発信や活用につなげてほしい。
- 兵庫県には四賞（兵庫県文化賞・科学賞・スポーツ賞・社会賞）があるが、無形文化財的な人を表彰する「人間国宝」のような制度を作って顕彰していただき、活動の場を広げてほしい。
- ホールを運営している立場から言えば、ICTは拍手とか息遣いが見えて感じられない。3月から9月まで収入がない方が沢山いて、それをどう支援するのか全国のホール運営者は大変苦慮した。
- 芸術文化立県ひょうごのシンボルとしては、人材育成が大きな要素となってくる。アーティストだけでなく、アートプロデューサー、オーディエンス、テクニカルメンバーの育成が大事である。
- 第3期は、5年という期間で、成果指標の「芸術文化に接する機会がある人と思う人の割合」と「自慢したい地域の宝があると思う人の割合」の数値を上げるのが、最終的なゴールと理解したが、少し、メリハリが必要だと思う。  
数字のベンチマークが出ているのなら、「こういう感じでこのベンチマークに行く」というような道筋がほしい。
- 「ウィズコロナ」時代は、オンラインが重要なチャネルになる。オンラインの場合は、コンテンツが非常に重要。ライバルは、同じ動画配信ではなく、メトロポリタンオペラであり、ルーブル美術館である。そのようなものと対抗できる、個性を生かした発信が必要。工夫をしないとなかなか難しい。  
一方で、オンラインは潜在的なマーケットにアプローチできる非常に重要なツールである。ピンチをチャンスに変える精神で、ぜひ盛り込んでほしい。

- 財源が限られている中、地方分権の流れ、新たな公、民間との協働が重要になってくる。素案のなかにも、プラットフォームについて書かれているが、これはとても重要なことだと思う。その中で、行政、つまり県あるいは市町村、政府が、民間ではできない人材育成やアウトリーチ、施設運営などへの支援を、もう少し書き加えるといいと思う。
- 分野が多岐にわたり、しかもコロナの状況がよく分からない状況のなかで、5年間の達成目標の設定は難しいと思う。また、具体性をもたせることと、特に強調したい部分を重点的に書くという意見に賛成したい。
- コロナ禍の状況を、「ピンチをチャンスに変える」という意識はとても良い。ICTの話が昨今話題によく出るが、今後はコミュニケーションのあり方がずいぶん変化する。従来のようなコンテンツで発信するだけではなく、発信の仕方、内容、作り方についても、新たなやり方の導入が必要だと思う。

若い方々のコミュニケーションのあり方を参考にすると良い。若い人は、感覚的に捉えることに優れている人が多くいる。実験的でもいいので、若い人を取り入れていくことは、若手育成にも繋がるのではないかな。
- 既にいろいろな地域でやっていることが、なかなか外に届きにくくなっている。発信と若手のサポートが必要。各地域を繋げるためには、アートプロデュースのマネジメントができる人材の育成も必要である。
- 各地域に既にある取組みを繋げるために、リモートでもいいので、お互い紹介し合うなどの企画をしてほしい。既にあるものを生かしながら、もっと大きな動きにすることで、地域の宝とか芸術文化に接する機会というのが、目に見える形で増えてくるのではないかな。
- 新型コロナウイルス感染症は、私たちの周囲の世界に大きな変化をもたらした。具体的には、「お家時間」というのができ、それによって、新たな趣味の創出や日本の伝統文化や伝統芸能もオンラインの配信をするなど、様々なことが見直されてきている。内閣府が6月に発表した調査によると、コロナ禍で、なんらかの挑戦や取組みを始めた人は全体の52%と、半数を超えている。また、在宅勤務の社会人を対象に、日本の伝統文化を提案する企業も増えてきている。
- これから学校で学ぶべき現代的な課題として、SDGsが挙げられる。具体的には、平和教育、貧困、環境、産業、資源といったものである。

今年11月、グローバル・イノベーション・センター・ジャパン（GIC Japan）が神戸市内に設置されたが、こういった状況の変化についても考えるべきだ。

- 芸術文化振興の基本は、「民の活力」である。個人・民間の暮らしのなかで生まれてくる感覚や意識、より良いものを求めていく気持ちが原点にある。そう考えると、官民の連携が当然必要となるので、役割の分担をしていくと良い。例えば人材育成や発信の場づくりなどは、行政の比重が大きいと思う。
- 一方で、民間の一人一人が芸術に接する機会をどう作っていくのかは、個々の意識や価値観に基づくところであるので、行政でやるべきこと、できること、民のなかで考えていくことを分ける必要がある。更に民のなかでも、企業や財界など、資金的な協力も当然必要となってくるので、具体的な役割分担をもう少し盛り込んでもいいのではないか。
- 「芸術文化に接する機会」については、成果指標として良いと思うが、「地域の宝」というのは、非常に多様な対象が含まれているのでビジョンの成果として合致しているとは言いがたい。

既存の県民意識調査的な指標を使用しているとは思いますが、それだけでは判断できないと思う。文化独特の側面が、いろいろな所で出てくると思うので、成果指標について、もう少し幅広く検討する必要がある。
- 成果指標の目標値について、数字が10%向上するという目標をつくっているが、例えば、豊岡に専門職大学ができることや、豊岡演劇祭などが新たに生まれていること、また、芸術文化センターが15年を迎えるなど、いろいろな動きを根拠に設定すべき。「今取り組んでいることを踏まえてこれくらいの向上を見込んでいる」というような、見通しの根拠を含める必要があるのではないか。
- 「芸術文化資源を通じた地域の活性化」と書かれているが、私は、「ヒト・モノ・カネ」が活発に動く姿が活性化だと思う。人が集まるだけでは行政費用が発生するだけの話で、産業の活性化に繋がるとはいえない。いわゆる仕事に繋がるとは、芸術文化をきっかけにして何ができるのかを考えないといけない。こういう流れについてビジョンに描かないと、「地方の活性化」や「産業に繋げる」といった言葉が、希薄に思えてしまう。
- 芸術文化によって産業振興に繋げるには、遠方からの宿泊客がいない限り、それが雇用につながらず、ヒト・モノ・カネの活性化にもならない。芸術文化をコンテンツとして観光の立場でみるとすれば、宿泊を伴う地域、あるいはアジア圏から人が来るくらいの公演が兵庫・神戸になればいけない。また、兵庫五国のコンテンツを分かりやすく伝える仕組みも必要だ。魅力をどのように伝えるのかを示していくことが、芸術文化振興ビジョンの観光への接近だと思う。いわゆる文化的な演出をどのように展開していくのかを記載していただきたい。

- 「兵庫5国の魅力を示していく」とあるが、どのように示していくのかを記載しないと第2期ビジョンとの違いがみえない。展開方向・主な取り組みがここで終わってしまうと、物足りない。
- 今後のビジョンも大事だが、コロナ禍に対してどうするのか、災害が来た時にどうするのかということを、重点的に考えていただきたい。
- 豊岡にできる専門職大学について、芸術大学なのか、それとも観光がメインなのか、よく分からないので、もう少し記載いただきたい。
- 兵庫県の芸能は、地域に根付いているものが沢山あるが、全てを知っている人はほとんどいないだろう。県民が様々な地域の芸能を知ることができるように、県民会館や公館など、ここに行けば伝統芸能を見ることができるという場所を作ってほしい。デカンショ節を知った神戸の人が丹波篠山に遊びに行くなど、地域が広がるきっかけにもなると思う。
- コロナ禍で発表ができなかったお祭りなど、地域の伝統芸能がなくなりつつある。そのような芸能の発表する場を作るために、県で発表する機会を提供していただきたい。
- 共生社会の実現という視点から、外国人居住者に対する施策も盛り込むべきだ。兵庫陶芸美術館の最新のお知らせは日本語のみである。兵庫県立美術館にいたっては、今どんな展覧会やっているかも英語では読めない。外国人向けの情報提供はとても大事で、文化芸術基本法でも「国民が等しく」文化芸術を享受できることが求められており、国立のミュージアムはすべて4カ国語表記になった。東京・六本木にある森美術館は全ての印刷物・情報発信を2カ国語でやっている。数年続けていると、外国人が来てくれる美術館になってきたと聞いた。  
 外国語表記は観光にも繋がることで、遠くから来てくれるのも大事だが、同時に地域のなかの潜在的な需要、本来なら来ていただける人に情報が届いていないことを、どう調整していくかが、共生という面では重要である。多言語対応については何カ所か記載されているが、共生という視点からもう少し考えてほしい。
- WEBサイトにおける英語併記が施設により大きく異なるのは、各施設が縦割りで別々にやっているからではないか。県のなかでも、外国人との共生を扱う国際担当部局にはバイリンガルの方が沢山いると思うので、色々な取り組みについて連携して、それぞれのリソースを活用できるようにしていただきたい。

- 長田のダンスボックスの大谷燠氏によれば、「劇場は人」だという。つまり、無観客であっても演劇をステージでやることで、色々なメンテナンスができる。人が関わらないと、劇場はだめになるらしい。人は、どうしてもお金がかかるが、行政には、ぜひ人材の雇用も考えていただきたい。例えば、現代アートの作家の中でも障害者のアートサポートに関心のある方は多く、京都府は非正規で雇用している。そういう方々が、地域の事業所に行って、作品の発掘やアートサポートをしている。近年では、芸術系大学の学生の就職先の一つが、福祉施設になっている。人がどう雇用されるかはとても大事なことなので、ぜひ考えてほしい。
  
- コロナ禍を通じて、生活のなかで芸術がいかに大切かということを改めて多くの人が認識したが、一方で、現代のグローバリゼーションのなかで見落とされてきたことが露わになった。

例えば、地域の民俗芸能のなかの疫病退散の神事が、コロナという疫病を理由に中止となるという、悪い冗談のようなことが起こっている。本来の疫病退散を祈るという行事ではなく、沢山の人が集まる観光資源に読みかえられていたためだ。
  
- 人数の数値目標に囚われてほしくない。美術館でも、大人数が集まって頭越しにしか絵が見られないような展覧会の有り様は、もはや難しくなってしまった。しかし、人に邪魔されずにゆったりと鑑賞できることが本来の美術のあり方であって、多くの人に囲まれながら見る展覧会でないとクリアできない数値目標のあり方は考え直さないといけない。
  
- 文化芸術基本計画との関係について、確認したい。文化財保護法の改正により、都道府県の大綱や市町村の文化財保存活用地域計画を作った時には基本的な目次案があって、その目次案にしたがって全体をとりまとめていた。文化芸術基本計画にも何らかの案があって、それを参酌してつくっていくのではないのかと思い、その確認をしていただきたい。
  
- 「芸術文化に接する機会に思う人の割合」が37.1%に対して、県民モニター第3回アンケート調査の「この1年間に鑑賞した割合」のデータの差があまりに大きすぎる。加えて、「芸術文化の接する機会」が当初の47%から下がってしまっているのであれば、それに対する何らかの対処が必要だが、その記載がない。芸術文化に接する機会が多いところと少ないところのデータが地域によってかなり違うらしいので、なんらかの形でこの距離感をなくしていくことを考えれば良い。



- シンポジウムなどでは、ある時から普通に手話が入ってくるようになった。同様に、今はリモートやICTが当たり前に入ってくる時代になったと考えられる。プラットフォームにおいても、ICTのプラットフォームを作る、リアルなプラットフォームと両方つくるなどと検討を進めていけば、具体的な姿が見えてくるのではないか。
- 文化財保護法の主眼は、文化財を活かしやすいように、それまで、各分野別に考えていた活用を、地域別に文化財を整理して活用しようと考えたところにある。つまり、活用のベクトルが180度変わり、専門分野からみてどういう活用の仕方があるかということではなく、地域からみるということである。

そのような根本的な考え方を考えていくところが、記載にない。また、市町村との連携をどうしていくかが、これからの芸術文化を考えていく際に大事になってくるが、今までのやり方と違うのかどうかということの記載が少ない。
- 文化芸術基本法の改正の趣旨として、教育、福祉、国際交流、まちづくり、観光、産業への貢献策を法の範囲内に入れると書いており、どのように計画に記載するのか、考慮していただきたい。
- ビジョンの素案を見ると、舞台芸術とか音楽とかにだけに力をいれているように見える。生活文化について、第2期ビジョンには盛り込まれていない。田舎では、高邁な芸術というよりも、実際の生活文化が、地域の人々に活気をもたらしている。例えば、茶道、俳句、川柳、書道、囲碁、将棋、彫刻、陶芸などいろいろなものが、生活文化のなかにある。兵庫が伝統文化の県であるならば、生活文化にもう少し力をいれてほしい。
- 小学校とか中学校での鑑賞も大事だが、体験も大事。それがなければ次に続かない。現在、会の役員のみならず、催しの参加者が少ないという悩みを感じている。伝統文化は、跡を継ぐ者がいないという問題が生じている。例えば、学校教育のなかで、わずかな時間でいいので、時間をとっていただいて、そういうことになじむ学生をつくってくれれば、伝統文化が続いていくのではないかと思う。
- 10年ほど前、丹波で茶道体験を行った当時小学校1年生だった子が、高等学校で茶道部に入ってくれた。高校の茶道部の講師をしている時に、「子どものころにやった茶道体験が忘れられなくて高校では茶道部に入りました」と聞いて大変嬉しかった。聞いてみると、その子のおばあちゃんが茶道に携わっていたらしい。身近にいるお年寄りが携わっていると若い子に繋がるのだと実感した。若い人だけの生活が多くなってきたなかでは、難しい。

子どもの頃の体験が、何年もたって影響がでてくる時がある。小中学校の学生時代に経験をさせるのはとても大切なことである。こうしたことについても、団体の交流会を開催していただいたら、もっと考えられると思う。

- 芸術文化が観光や産業に関わること自体は大事だが、まずは地域の人が元気になることが芸術文化の目的だと、私は考えている。芸術文化によって、地域の住民が楽しさを感じ、団結をし、色んな生きがいとなる。それがひいては、産業の発展にもつながっていくのではないかと。
- 今の状況で、子どもたちが芸術文化に触れる機会を積極的に作っていくのはなかなか難しい。ただ、子どもたちのなかには、絵や字が上手な子も沢山いる。例えば、絵や標語のコンクールについて十分な周知ができていないので、もっと宣伝を上手にさせていただき、学校で取り組めればと思う。子どもを育てる場としては、子どもたちがやる気を出させるものをどんどん提示していただけたらありがたい。
- コロナの影響で修学旅行を近場にする学校が増えた。そのなかで、兵庫県はすごく良い場所だと改めて感じた。神戸の中学校でも、兵庫県のなかで修学旅行をした。近畿圏内の学校も、兵庫県に修学旅行で沢山来たようである。こういったことを、どんどん宣伝していけば良い。修学旅行は芸術文化だけではないが、そこに芸術文化をプラスして取り組んでいくことにより、兵庫県を目指して来てもらえると思う。
- 芸術文化振興ビジョンの委員になるまで、ビジョンのことを全く知らなかった。ビジョンを作ったあとに、どういう風に周知していくかについて考えていきたい。
- 文化から観光へどのようにつなげていくのかも含めて、もう少し具体性をもたして、繋げていくべきではないか。私はどちらかというと文化側なので、観光とはちょっと違った立場であるが、多少もの足りない。
- 豊岡の芸術文化観光専門職大学について、開学の趣旨や具体的な内容がわかるよう、ビジョンのなかで触れてほしい。  
豊岡という地域が新しい文化の発信点となることで、兵庫県全体への広がりにも期待をもっている。芸術文化センターが震災復興の象徴となったと同様に、専門職大学の開学はインパクトがある出来事であると思う。兵庫県でなければ成し得ることができなかったのではないかと。
- 芸術を次世代につなげていく視点から見ると、アウトリーチ活動はできるだけ早く、保育園児、幼稚園児から活動を進めるのが望ましい。兵庫県在住の芸術家の力を借りて、子どもたちに芸術に触れる機会を数多く提供していきたい。

また、ただ鑑賞するだけではなく、同時に体験活動があれば、子どもたちの興味や関心が心に残りやすい。アウトリーチ活動を通じて、豊かな感性を育てることができ、コミュニケーション力や人間性の涵養にも繋がっていく。いろいろな芸術の分野で、アウトリーチ活動を推し進めたい。

- 生きる力など人間の根幹的な部分で、芸術の果たす力は大きい。学校現場の時間的制約もあるだろうが、芸術活動は重要かつ必要なものである。ぜひ、アウトリーチ活動を取り入れていただきたい。
- 芸術文化について、全く同じイメージをもっている人はいないのではないかと思う。それぞれの芸術文化のイメージで正しい。そういった意味で、芸術文化の定義は、しないといけなのだけれども、しても仕方がないものでもあると思う。
- 今の施策をみても、県庁の多くの分野の行事や施策は、単に芸術文化課だけの施策ではなくて、様々な分野の施策が混じっている。  
芸術文化ビジョンの思いを、県庁の様々な部署の施策に反映していかないといけない。教育委員会、観光、産業、福祉、地域振興など関係する部署に、ここに書いてある思いを、ぜひいろいろな場面で共有していただきたい。もちろん、県民局、市町、企業、団体、県民の方にも、どのように周知、共有していくのかについて、議論していただきたい。
- コロナについて、施設管理の立場から言うと、新しい施設と古い施設でとれる対応が違ってくる。どう対応すべきなのか、県が基準を示さないと、実際なにをどこまでしていいのか分からない。結局、収容人数は2分の1のままであるなど、なかなか新たな基準には踏み切れない部分があったりする。  
また、コロナ禍で、施設に来ようと思っても来られない方が増えている。特にギャラリーについては、ギャラリーの様子をICTで提供することがメリットとなるのではと考えている。

## 6 諸連絡

議事録の公開と次回の日程調整、パブリック・コメント等今後の進め方について、事務局から説明を行った。

## 7 閉会挨拶

藤原知事公室長が、閉会挨拶を行い、今後のさらなる審議を依頼した。

## 8 閉会